

〈研究・調査〉

「和古書の挿し絵にみる生活風景」展示会を経験して
—京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会から—

村 田 光 子
櫻 田 志津子

(京都大学経済学部図書室)

はじめに

昨年は、京都大学経済学部が創立されて80周年にあたる年だった。平成11年10月2日（土）には、京都市蹴上の都ホテルで京都大学経済学部創立80周年記念式典・祝賀会等が開催され、全国から卒業生が集まった。その際に、経済学部のある京都大学本部キャンパスを訪問するきっかけにと、経済学部図書室職員により経済学部所蔵資料の展示会開催が発案された。展示内容は、本学部社会思想史専攻の田中秀夫教授が中心となって経済学の歩みを辿っていく「第1部 経済学の系譜」（展示点数約80点）と、本学部図書室所蔵の和古書の挿し絵を展示した「第2部 和古書の挿し絵にみる生活風景」（展示点数約50点）の2部構成になった。

第2部は、図書室職員が分担して展示にふさわしい資料を選び出し、その資料・箇所について図録（図1）に説明文を執筆することにした。また、展示会のキャプションの制作や展示会場での説明も行った。

日常業務では、単に出納するだけにおわっていた資料も、こうした作業の過程で、いろいろな参考文献を読みながら詳細にみることになり、資料を知るまたとない機会となった。私たちが、この展示会の準備をする中で、これまで知られていなかった新たな資料の発見や、近世日本の産業、庶民の生活を把握するうえでの和古書中にある挿し絵の意義について認識を新たにさせられた点について、それらの資料解

説をするとともにいくつかの点について述べることにする。

1 世界の旅—『環海異聞』、農林水産業—『広益国産考』、 『日本山海名物図会』

京都大学経済学部創立 80 周年記念

古典文献展示会図録

第1部：経済学の系譜

第2部：和古書の挿し絵にみる生活風景

日時：1999年10月1日（金）～5日（火）

午前10時～午後4時30分

会場：京都大学附属図書館展示ホール（3階）



ADAM SMITH, L.L.D.
Pioneer of Modern Economics
Portrait by J. Nisbet, Engraved by C. Pinet

1999

『京都大学経済学部創立

80周年記念古典文献展示会図録』

ロシア各地で生活し、12年後に帰国した仙台の漁民の聞き書きをもとに蘭学者大槻玄沢等が著わした書物で、その内容は鎖国時代の日本では大変珍しく、外国の文化や風俗を知るのに貴重な書物であった。

②農林業 —『広益国産考』

江戸時代の農業ジャーナリスト大蔵永常が、諸国を遊歴してそこでの知見をもとに著わした書物で、みずからの体験をもとにした詳細な挿絵がついている。宮崎安貞の著書『農業全書』とともに江戸時代

（1） 展示した資料

『和古書の挿絵にみる生活風景』をテーマに、その中で「近世の旅（日本・世界）」と「近世の庶民生活（農林・水産業、商工業その他）」をサブテーマとして資料探しを行った。これらのテーマにそってとりあげた資料は3点である。

① 世界の「旅」—『環海異聞』

世界の「旅」では『環海異聞』をとりあげることにしたが、これは挿絵がカラーで描かれていて実に見事なもので、江戸時代、ロシアへ漂流して

の農業書の代表である。

③水産業 — 『日本山海名物図会』

日本各地の名産品の生産、捕採の技術を図示し、解説をあたえたもので、著者は平瀬徹斎、長谷川光信の画を加えて刊行したものである。画は正確・詳密で生産技術の特徴をよくあらわしている。特に圧巻なのは巻五で水産関係を記していて、このなかに江戸時代の捕鯨が順を追って描かれている。

(2) 図録作成

図録には、挿絵にも簡単な説明を加えることにした。どの挿絵を出すべきかは、その書物の特徴をあらわし、かつ誰が見ても面白そうなものを選んだ。さいわい、『環海異聞』と『広益国産考』は、復刻活字版があり、これらに掲載されている解題や解説を参考にして図録に掲載する説明をまとめることができた。また、子供向けの漂流記、室賀信夫著『日本人漂流物語』（新学社文庫、1987）や別の漂流物語を読んだり、『国史大辞典』なども参照しているうち、『環海異聞』が江戸時代におこった漂流物語の代表作で、特にロシア領へ漂着した漂流記としては大黒屋光太夫らのロシア漂流を書いた桂川甫周の『北槎聞略』とともに双璧と称せられていることを知った。『広益国産考』については、凶作が珍しくなかった江戸時代に農家を富ませるための副業の重要性を説いた永常の思想は、各地の特産物として現代にも連綿と受け継がれているように思われる。『日本山海名物図会』は、現代語訳が見当たらずに苦勞した。これを読むために吉田豊著『寺子屋式古文書手習い』（柏書房、1998）を利用して、「第二章 かな読みの基礎」で明治期の国語教科書『小学読本』と『和文読本』を教材として、かな読みを基礎的なところから学習することになった。もともとなる漢字と関連づけることによって、少しずつ解読することができた。また、公共図書館へ出向いて高橋順一著『鯨の文化誌―捕鯨文化の航跡をたどる―』（淡交社、1992）など、捕鯨について書かれた書物数冊を借り出したりしながら、変体仮名と古式捕鯨についての知識を得て、ようやく挿絵の説明文を読み解くことができた。

(3) 展示会場での説明

自分たちで資料を探し出し、それらを展示して、図録の説明文の作成やキャプションの制作を行い、なお展示会場での説明も行うことになった。初めての経験で上手にできるかどうか心配であったが、来館者にわかってもらえるよう、自分が面白いと思ったことを伝えることにした。参加者の反応を感じるゆとりはなかったが、『環海異聞』を説明中、「仙台の漁民は16名のうち4名が12年ぶりで日本へ帰ってきた」と言ったとき、「ホー」というなんともいえないどよめきがおこったことを記憶している。決して資料全てに目を通せたわけではないので恥ずかしいが、今回の展示会では資料選びから図録作り、展示、説明会と一連の作業に携わった。これらを通じ、日頃閲覧掛でカウンター業務のひとつとして行っている貴重書に対する思い入れが、われながら変化してきたことに気がついた。「誰が書いて、どういう内容なのか。どんな研究に必要なのか」と。私たち図書館職員は自分の所属する図書室資料に精通したいと願っている。その手段として展示会をすることは、たしかに日常業務を行いながらの作業で余分なエネルギーを必要とするが、また、益すること大であることを痛感した。

2. 資料との出会い—日本を旅することから—

(1) 資料をさがす

挿し絵のある和古書を展示しようというのが今回の展示会の主旨であり、まずは挿し絵のある古書を書庫の中から探す、という作業が始まった。挿し絵が含まれている書にはいくつかの種類が考えられるが、そのひとつとして、江戸時代の人々が旅をすることによって見た日本各地の風景も挿し絵によって伝えられたのではないかと考え、私はテーマを「旅」に設定した。

「旅」を探す私の目に飛び込んできた背文字は、林子平の『三国通覧図説』であった。ページを繰ってみると、当初の期待通り、蝦夷地の人々の衣服、子どもの遊ぶ姿、漁をする様子など、当時の生活を伝

える興味深い挿し絵が豊富に挿入されていた。

次に探し出したものは、松浦武四郎の『石狩日誌』、『久摺日誌』で、これらにも武四郎が旅をした地の地図、アイヌの人々、蝦夷各地の風景など武四郎自身の手になる多くの挿し絵が見られた。

大坂各地の光景を描いた鶏鳴舎暁晴（暁鐘成）の『浪華の賑ひ』というものにも出会えた。著者の暁晴は大坂の人であり、これは旅の記録ではないが、大坂の市場、港、寺院、料亭など人が集まるさまざまな場所が描かれていて、江戸時代の大坂の人々の暮らしぶりが彷彿とされ、たいへん興味深く、これもぜひ展示したいと思った。

その他各地を紹介する資料として、京都の蘭方医広川解が長崎に遊学した折りに見聞きした事物を書き記した『長崎聞見録』、曲亭馬琴が江戸から東海道を経て京阪、伊勢への旅で得た興味深い話を書き留めた『羈旅漫録』を選んだ。

もう一点、「旅」に関する古書を探索していて、発見できたものに『文久三年記』があった。表紙をめくってみると、「文久癸亥三年三月將軍御上洛二付…」という書き出しで始まっている。挿し絵はないかと見ていくと、大名行列のようなものが描かれていて、「大樹公」「一橋公」「水戸公」などの文字も記されている。とすると、この「文久三年云々」というのは、幕末に將軍が二百数十年ぶりに上洛したという史実を語っているのだろうか。そして、この絵はそのおり將軍一行が京の町を歩いた姿を、その場において実際に見た人が描いたものなのか。内容は、当時の社会情勢、將軍の二条城入城、孝明天皇の加茂大社・石清水八幡宮への攘夷祈願の行幸などに関する資料的なものがさまざまに集められている。著者は誰なのか。この書は上野文庫¹⁾のコレクションに含まれるものであり、「上野文庫目録」の索引で引いてみると『文久三年記』は出ているが、著者の名前はない。森末義彰、古市貞次、堤精二編『国書総目録』（岩波書店）には、このタイトルのは出てこない。京都大学経済学部図書室にある限りの近世史に関する目録類にも出ていない。幕末に関する研究書、史料も何冊かあたってみたが、『文久三年記』を引用・紹介しているものは見つけれなかった。

著者を特定することはできなかったけれど、この書がどういう性格

のものなのか、展示会に出展するからには明らかにしなければならない。そこで、文学部の藤井穰治教授と人文科学研究所の佐々木克教授に解説をお願いした。

1) 上野文庫：元朝日新聞社主上野精一氏（1882-1970）と同じく元社主上野淳一氏（1909-1997）の寄贈書で、内外の新聞とジャーナリズム・マスコミ関係書の一大コレクション。政治学・経済学・哲学・歴史学に関する貴重な文献も多い。約27,000冊。「上野文庫解題目録」全3冊（1960-1962）、「上野文庫目録」全4冊（1978-1994）がある。

（2）資料を読む

展示する資料が決まると、次は展示会の図録やキャプションをつくるために、資料や解説書などを読む作業に入った。

『三国通覧図説』と『石狩日誌』、『久摺日誌』は、それぞれ活字本が刊行されていた。『三国通覧図説』は『大日本思想全集13巻』（大日本思想全集刊行会、1932）に収録されており、『石狩日誌』『久摺日誌』は、『日本古典全集3期 多気志楼蝦夷日誌集 第1－第3』（日本古典全集刊行会、1929）に収録されていた。これらはともに近世の蝦夷地の事情を記したものであったが、挿し絵を見ていて、両者の違いに気付くところがあった。『石狩日誌』『久摺日誌』の絵には武四郎自筆のものが多くあるのだが、その絵の中に武四郎自身の姿が描かれているのだ。アイヌの人たちとともに舟に乗っている、あるいはアイヌの人たちと宴を楽しんでいる武四郎の姿がユーモラスな筆致で描かれている。本文でも、子平が「蝦夷人も同類の人也然れども其国文華開けず今の世迄も開闢の時の如くにて…」と記しているのに対し、武四郎はアイヌの人たちを愛情のこもった目で見ている。この時代にアイヌの人たちと交流を持てたということに驚かされた。両者とも、蝦夷地に関心を持ったきっかけは、鎖国時代の日本近海に外国船が接近してきたことによってかりたてられた「北方への関心」からであったようだ。しかし武四郎は蝦夷地にとりつかれたように何度も足を運び、その自然のすばらしさ、アイヌの人たちの人間性に魅せられていたのだ。

武四郎については吉田武三が何冊も研究書を著しているが、経済学

部にも『評伝松浦武四郎』『拾遺松浦武四郎』『増補松浦武四郎』（松浦武四郎伝刊行会、1963、1964、1966）の3冊が所蔵されている。また、花崎皋平著『静かな大地：松浦武四郎とアイヌ民族』（岩波書店、1988）は松浦武四郎という人を知る上でたいへん参考になった。これらの図書を読むことによって、私とその挿し絵から抱いた武四郎の印象はより鮮明なものになっていった。アイヌを抑圧する松前藩や場所請負人を憎み、抗議し、明治新政府にアイヌの解放を進言するが、聞き入れられず、用意された官職も位階も返上して、1858年に北海道への最後の旅を終えてから、1888年に没する迄、一度もこの愛した地に足を踏み入れなかった武四郎であった。また、展示資料の『石狩日誌』などは、膨大な調査報告書を、武四郎自らが一般人向けにダイジェスト版としてまとめたものであることもわかった。

『浪華の賑ひ』は、活字本を目にすることはできなかったが、この絵を引用したものは数多く見られた。『大阪府史』（大阪府史編集専門委員会編、1978～1999）には随所に引かれている。『日本の近世』（中央公論社、1991～1994）にも数カ所に引用があり、この資料が江戸時代大坂の経済、社会などを知る上での貴重な資料であることがわかる。



京都新聞1999年9月25日付朝刊「京大で和装本発見—幕末期の行幸 群がる町衆ら」（京都新聞掲載）

ていただいた。この図録の行幸の絵と文章が新聞記者の目に留まり、展示会を前に新聞社からの取材と撮影が相次いだ。各紙に大きく報道され（図2）、展示会にも新聞記事を見て訪れたという人が少なからずあった。

一方、『文久三年記』は、藤井、佐々木両教授から、筆者は大坂の町役人層か知識人層の人物であること、文久3年（1963年）の將軍上洛や下坂、天皇行幸の際の民衆の動きを伝える貴重な資料であることを教えていただいた。佐々木先生には図録に解説まで書いて

(3) 資料を説明する

展示会開催中の説明会では、私はとくに、武四郎の蝦夷地への思いを見てくれる人に伝えたいと思った。小さな舟でアイヌとともに石狩川をさかのぼる武四郎の絵も、亜寒湖を描いた図も展示資料としては地味である。しかし、石狩川の支流の1本1本をさかのぼる武四郎とアイヌたちとの間でどんな会話が交わされたのかと想像をかきたてられる、あるいは『久摺日誌』の序に書かれた「当所を一覧し、広漠肥沃の良地不毛ならざる事を同士に知らさんとの微意也」との武四郎の思いが伝わってくる絵であった。

『文久三年記』は行幸の絵を展示し、これが事実を示すものであることを説明した。田中彰編『近代国家への志向』（『日本の近世』第18巻、中央公論社、1994）の中で、佐々木克氏は2枚の錦絵を示して、これらの錦絵の図が虚構であることを述べている。1枚めの錦絵「加茂社の行幸」では将軍家茂は輿に乗って天皇に従っているが、実際には馬上で従ったこと、2枚めの「石清水八幡宮行幸」では家茂は加わらなかったにもかかわらず絵では参加していることになっていると説明されている。『文久三年記』の絵では史実通り、加茂社には馬で従う将軍の姿が描かれ、石清水八幡宮の行幸には将軍の姿はない。

今回展示した資料は、どれも今まで私自身手にとって見たことがなかったものばかりであり、存在すら知らなかったとも言える。「挿し絵のあるものをさがす」という実に単純な動機で「さがしあてた」のだ。この展示会がなかったら、これから先もその存在を知られることもなく書庫に眠っていたかもしれない。それが多くの人の目にふれることができた。

3. これからの課題

展示会は平成11年10月1日から5日までの短い期間ではあったが、学内外から645名の入場者を得て、終了した。展示のために、資料を探し、参考文献を読む等の作業は、確かに負担であった。私たちは、展示会により、如何に所属する図書室の資料について知らなかったか、

ということをお願い知らされた。私たちは、もっともっと資料について知りたいし、知ることににより、くずし字や変体仮名が読めるように努力もするし、図書室の資料を自分のために利用することにより、資料利用を自分のこととして体験することにもなる。

展示会終了後の経済学部図書委員会では、ユニークな資料が発見されたことは、展示会というきっかけがあったからこそであるという評価がなされた。また、学生が経済学に親しむ良い機会であり、定期的に開催することを望むという意見もだされた。

日常業務を抱える中で、今回の展示会のように、図書室職員が一体となって取り組まないと成功できない企画は、頻繁の開催は難しい。しかし、資料をめぐる今回の体験は、展示というものが、利用者にとっても、図書室職員にとっても、よい経験であったと考える。